

国立天文台・天文情報センター・特別客員研究員 中桐正夫

**\*登録有形文化財に答申された国立天文台門衛所**

アーカイブ新聞第706号に「登録有形文化財になった国立天文台表門」という記事を書いた。2013年11月15日の文化庁文化審議会で国立天文台の7件の建造物が登録有形文化財として文部科学大臣に答申されたのである。今回はその中の一つ「国立天文台門衛所」について書く。国立天文台は1988年に設立された大学共同利用機関法人「自然科学研究機構」の一員であるが、その前身の一つである東京大学東京天文台は1888年に設立されている。東京大学東京天文台の前身の一つである東京大学天象台の前身東京大学観象台1878年に設立されており、筆者の様な。筆者の様な東京大学時代からの国立天文台のメンバーは、国立天文台は満135年を経ていると考えている。設立当初の東京大学東京天文台は現在の港区麻布にあり、都心の明かりから逃げ、広い敷地を求めて三鷹村に土地を購入し大正3年から移転工事を始めた。今回登録有形文化財に登録された7件は、麻布から三鷹に移転当時に建設され、90年近い年月を経た建物であり、門衛所は1924年(大正13年)に建てられたものである。図1がその設計図である。

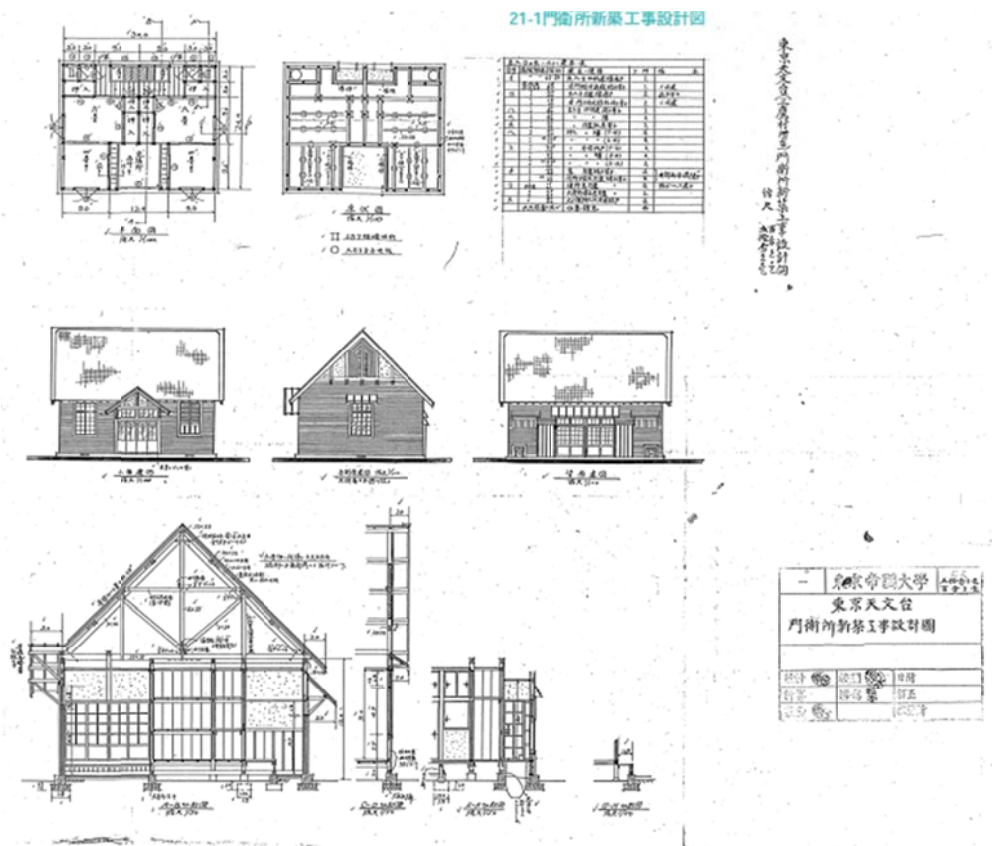


図1

この門衛所は、建築の専門家の所見に依れば、「天文台内に現存する唯一の木造洋風建築である。国指定文化財等データベースによると、門衛所では 8 例の登録有形文化財があり、守衛所では 3 件の登録有形文化財がある。また重要文化財は 2 例ある。東京都指定文化財情報データベースによると、旧前田侯爵家駒場本邸の門衛所が都指定有形文化財となっている。日本建築学会歴史的建築総目録データベースによると、門衛所では全国で 25 例、守衛所では 16 例で、内 2 例は重複しているため計 41 例が現存する。このうち、東京都では東京大学門衛所（明治 45 年、RC 造）、新宿御苑新宿門門衛所（昭和 2 年、RC 造）、同大木戸門（昭和 2 年、RC 造）、一橋大学旧門衛所（昭和 6 年、木造）、東京書籍印刷（昭和 11 年、RC 造）が確認されており、大正期のものはなく、木造も 1 例である。さらに、三鷹市内では近代建築は 8 例（天文台施設を除く）、内大正期のものは 3 例と少なく、同地において、貴重な洋風建築のひとつである。 外観上は、通常望見できる範囲の状態は良く、改変も現代の門衛所としての機能に伴う範囲にとどまっている。幅の狭い板を使った下見板張りの仕上げも特徴的である。」とある。

筆者の知る限り、門衛所の写っている最古の写真が写真 1 である。



写真 1

写真 1 には、昭和 20 年 2 月に焼失した旧本館がバックに移っている珍しい写真である。この写真は、京都大学の山本一清氏の遺品の中から見つけたものである。

現在の門衛所は、通常は守衛所と呼ばれ、守衛業務の契約会社の派遣社員の詰所、国立天文台の受付業務を行っている(写真 2、3)。



写真 2



写真 3

筆者が三鷹の東京天文台に異動してきたときには、この門衛所には正規の守衛さんが数名勤務しており、構内のドームで観測が行われる夜間も24時間体制で観測者の安全を守っていた。時代が流れ、昔小使いさんと呼ばれた用務員さん、守衛さんなどが最初の定員削減の対象になり、それらの仕事は外注になり、現在は派遣会社の守衛さんが業務にあっている。正門、門衛所は国立天文台の入り口であり、顔である。四季の美しい姿、景色は変わらない(写真4)。



写真4

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、[arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp](mailto:arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp)